

何度もけいこすべし、ちよいとした、さかなものによし

りんご雞卵

玉子を煮ぬきて

玉子を鍋に水のうちより入て、火にかけ、始より終までかきまわしをるべし、二十分間にして金杓子にてわけて湯を切て、見るにたゝちに、皮のかわきたるが出来たるしるしなり、これを煮ぬき玉子といふ

からを、白身にきずのつかぬやうにとりて、湯につけおき、布巾に包みて、形状を丸くなほして、上の所を指先にて、少しくぼくして、さて口なし薬種店にの煎汁にて、ざつと煮て、又紅のよろしき物工へにのきりよみ、鍋に入てどかし、煮かへしたるに、入て、ちよつと赤みをつけ、取出しりんごの

葉か、又は海棠の葉の枝すこしつきたるをさして出すなり

栗一つ握つて丸き子の手かな 五明

小なき日記 (第二回)

印東おとな

げん坊

十六日 物欲しき時お重ね(兩手を重ねて出すこと)を爲すことを覺えたり。

父君に「メー」と叱られし時は必ず母の膝に頭をつけて横むきに爲り母君居らぬ時は疊へ。

十九日 窓の下に乳呑み居しに運送車のかげ聲して通るに驚き母にしがみ付叫ぶ。

二十日 玩具の手桶にて姉さんの頭を打ち泣かす

二十一日 夕餉の膳にすがりて父君にゆかり(紫その粉)をなめさせられ泣く。

夕方知己の家へ行きしに初めの程は人々の顔を見

て座らずむづかり居りしにお菓子出でたれば直

にお重ねをして又氷を出すを見て飛び上り喜びオ

イデ〜を爲し人々を笑はす。

二十二日初めてお辭氣を爲す。足を出し座りて頭

を横に疊につけるなり。

九月三日 誰によらず人を見ればバ〜と云ふ

手を引かれて歩む事上手になりたり。

四日 父君に負紐にて柱に結ひつけられかどな

しく遊ぶ。

七日 蟬を貰ひ「オト、〜」と喜び玩ひて遂

に殺して仕舞ふ。

お辭氣を爲るに中々場合よく爲す、人の來た時

歸へる時さては物ほしき時頂戴せし時など。

九日 わんよと云へば必ず兩手を出し手を引け

と求む食ひつく事好なり。

十四日 上野動物園にて象を見て恐ろしがり龜を

みて喜ぶ。

お菓子を半分割りて與へしに取らず強ひて持せ

は直に投げ捨て丸さを興へしにお重ねをして取る

團扇にきり〜すの繪あり是を見てオト〜

とて摘み取らんとて大騒きを爲し遂に團扇を破る

十五日 獨り立ちて三足程歩む

お姉さま

二十一日 げんチャンの玩具にヒョットコと、お多

福の面ありヒョットコはげんチャン、おかめは姉さ

まよと云ひしに姉チャンの色が白いとて喜ぶ。

二十三日 夜下婢と散歩して酒やの前にて月を見

さくや(下婢)お月さまにニッわるね自家のお庭に

もあるし此所の前にもあるね。

二十六日 父君らと品川へ行く馬車氣車に乗りし外、悉く歩む總てにて今日は二十五六町は歩みしならん。

實に足は達者にて家に歸りても疲れしさま見えす道に人力車に逢ひても乗ろうなど云ひし事なし。

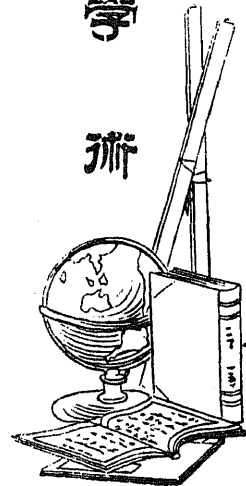
九月八日 麴町の親戚へ行き泊れど云はれしも泊らず家に歸へりて今度父様が連れてゆくから泊て

お出と云ひしに承知しソレナラ父様が歸へる時泣きはしまいねと念を押せしにイ、エ父様がお歸へり成さる時は私も一所に歸へるのよ。

十九日 縁日にて金色の指わを買て頂き金の指わ母様のと同じだどて大喜びす。

父「坊や、お母さんの名は何さいふの？
子「オイ、さいふ名とコラ、さいふの名と

學
術



不思議の徳利

關本幸太郎

打出の徳といへば皆さん御存じの昔話にあることですが、明治の今日にでも、之に似寄つたことを手品師がよくいたします。それは外でもありません。一つの徳利の中から茶を出したり、水を出したり、牛乳でも、御酒でも御望み次第のものをだします。實に奇妙不思議の至りに思はれる。が、世の中におぼけはありませんと同じ事で理屈に合